

最近の乗用車事情

赤谷慶子

吾はこの四十年獨逸製の愛車を微用してあり。現在の車は八臺目に當たる。この數十年自動車は全てコンピュータ制御となりて、我愛車も趨勢に違はず。然れども一か所狂はば、そは他に波及するなり。數週間前、この猛暑のなか空調狂ひ、冷房ならず熱風排出し悉皆制御不能となりけり。さる會議に赴くところにて目的地の半分まで走れど熱風止まらず、この暑さに窗全開にすとも蒸し風呂の如き有様となり、このままにては熱中症の危険性少なからずと、平身低頭謝りの電話入れ碑文谷の整備工場へ向かへど、定休日にて閉まれり。斷念して歸宅し、翌日整備士に診せたり。「データによれば、つかのま制御不能になれど、現在は正常に作動せり」といふ。データといふ事はコンピュータ上かくは現れたるのみ。翌週遠方にゆく用事ありて、ふたたび空調誤作動せば不安なり。何とかならずと押し問答せり。葉月上旬、車檢の豫約ありて、整備工場に入る所、その際余裕を以て診断せむとの由。それまで不安抱きつつ愛車を運轉する外なしと思ひ、憂ひに絶えざりけり。車の制御コンピュータに任せざるを得ざるの儀、げにわづらはしく嘆はしからずや。二十年前にもならむと記憶せる、首都高速道千代田トンネル道手前の玉突き事故に卷込まれたり。後續車の前部は車種分からぬほどに歪めり。我愛車の後部バンパーは半壊し、トランクは五センチ後部座席に食ひ込みき。愛車は事故車なる事を「自覺」し速度を四十キロ以上いだすを拒みき。日本自動車連盟(JAF)のレッカー車來れば、我が愛車牽引せらるると思ひしが、豈圖らむ、車の前部を上ぐればコンピュータ狂ふ。よりて「レッカー車の後ろを走りたいまへ」と整備士は進言したれども、四十キロにて走行すれば、また追突せらるるにあらざやとの恐怖に驅られ、レッカー車に愛車の後ろを走らむことを依頼し、芝浦の整備工場まで自力にて走行せり。さてもわづらはしき事よと覺ゆ。コンピュータ制御は確かに便利なる事多々あり。例へば携帯電話置く臺あり、そこにて充電す、電話かかりくとも取り上ぐることなく、ステアリングのボタン押せば繋がる等々。然しながらそは便利なりや否や全く分からず。

(令和五年七月三十日受附)